名古屋女子大学　紀要　51（人・社）1～11　2005

ブロンテ姉妹初期作品研究（Ⅰ）
――シャーロット･ブロンテを中心に――

杉 村　　藍

On the Early Works of the Brontë Sisters（Ⅰ）: Focussing on the Young Charlotte Brontë

Ai SUGIMURA

Ⅰ はじめに

ブロンテ姉妹（Charlotte Brontë, 1816-55, Emily Brontë, 1818-48, Anne Brontë, 1820-49）が幼い頃から創作活動をしていて、それが後の小説作品を生み出す重要な下地となったことはよく知られている。シャーロットの場合を例に取ると、10歳頃から始まって、「アングリアよさらば」（“Farewell to Angria”, 1839）を書いた23歳まで、10年以上にわたってこれらの初期作品を書いており、その量は後の小説作品群を凌ぐといわれる。しかしながら、ブロンテ研究においてこの初期作品の重要性が注目され始めたのは、姉妹の小説が発表されてから約一世紀後、ようやく20世紀も半ば近くになってからのことであった。

最初にこれらの初期作品群の存在に触れたのは、シャーロットの伝記を執筆したギャスケル夫人（Elizabeth Cleghorn Gaskell, 1810-65）であった。『シャーロット･ブロンテの生涯』（*The Life of Charlotte Brontë*, 1857）の第 5 章で、夫人はその膨大な量と、非常に想像力豊かで、ある意味現実離れした、作家の少女時代の原稿の性質について述べている。

しかし、原稿が非常に小さな紙面に書き込まれてテキストが判読しにくかったことと、また原稿そのものが収集家たちによって売買され世界中に散逸してしまったことなどから、これら初期作品の研究はなかなか進まなかった。また、シャーロットの夫ニコルズ（Arthur Bell Nicholls, 1818-1906）から原稿を買い取ったワイズ（Thomas J. Wise）による作品の編集にも問題があったことが指摘されており、改竄や加筆の疑いさえある。これらもまた、初期作品研究を困難にしていた一因である。

こうしたなかで初期作品研究に先鞭をつけたのはファニー･エリザベス･ラチフォード（Fannie Elizabeth Ratchford）であった。彼女は1941年に *The Brontë's Web of Childhood*（New York: Columbia University Press）を発表し、初期作品と後の小説作品との関連を指摘した。他にウィニフレッド･ジェラン（Winifred Gèrin）やクリスティーン･アレグザンダー（Christine Alexander）らがこれら初期作品の研究を中心的に進めてきた。特にアレグザンダーはシャーロットの初期作品をまとめた *The Early Writings of Charlotte Brontë* という作品集を現在刊行中であり、全巻が刊行されれば、初期作品のみならずブロンテ研究そのものが大きく進展する契機となるであろう。

さて、ここではブロンテたちの創作の出発点を見つめ、それがどのような特徴をもち、またどのように発展していったのかを、ブロンテきょうだいのなかでも特にシャーロット･ブロン

テの場合を例に取りながら振り返ってみたい。

Ⅱ 初期作品の始まり

まず、ブロンテたちがどのようにして物語作りを始めることになったのかを、シャーロットの残した記録から見てみよう。

> Papa bought Branwell some soldiers from Leeds. When Papa came home it was night and we were in bed, so next morning Branwell came to our door with a box of soldiers. Emily and I jumped out of bed and I snatched up one and exclaimed, ‘This is the Duke of Wellington! It shall be mine!’ When I said this, Emily likewise took one and said it should be hers. When Anne came down she took one also. Mine was the prettiest of the whole and perfect in every part. Emily's was a grave-looking fellow. We called him ‘Gravey’. Anne's was a queer little thing, very much like herself. He was called ‘Waiting Boy’. Branwell chose ‘Bonaparte’.[1]

よく知られているように、ブロンテたちが創作を始めるきっかけとなったのは、1826年 6 月、父パトリック（Patrick Brontë, 1777-1861）が一人息子のブランウェル（Patrick Branwell Brontë, 1817-1848）に買い与えた一箱の木製の兵隊の人形であった。この時シャーロットは10歳、ブランウェルは 8 歳、エミリ 7 歳、アン 6 歳であった。ここにはすでに、シャーロットの英雄ウェリントン公爵が登場している。彼女たちはこの人形を主人公として西アフリカに架空の王国を築き、さまざまな冒険を想像した。そして一家が購読していた *Blackwood's Magazine* をまねて、自分たちの架空の冒険世界で雑誌も刊行していた。雑誌は登場人物であるこれら人形たちに合わせたサイズで作られたため、例えば約 5 cm × 4 cm という非常に小さな紙面に驚異的な小さな文字がびっしりと書かれていた。[2]

Blackwood's Young Men's Magazine
Dec. 1829, p. 7　（actual size）[3]

雑誌以外の物語もやはり同様の小型サイズの冊子に書かれたため、後の研究者たちがこれらの初期作品を活字に起こす際には、オリジナルの原稿がこのように非常に細密であったことから、顕微鏡で確認しながら作業をしたといわれている。文字が小さすぎたため、それでもなお判読できない部分もあったという。シャーロットは版画などを細部にわたって精密に模写したことで視力を落としたといわれているが、こうした豆本作りもかなり目には負担の大きな作業であったと思われる。[4]

さて、こうして始まった子どもたちの空想の遊びであるが、先に引用したと同じ「今年のできごと」（“The History of the Year”, 1829）のなかには、次のような興味ぶかい記述もある。

> Our plays were established: Young Men, June 1826; our Fellows, July 1827; Islanders,

> December 1827. Those are our three great plays that are not kept secret. Emily's and my bed plays were established the 1st December 1827, the others March 1828. Bed plays mean secret plays; they are very nice ones. All our plays are very strange ones. Their nature I need not write on paper for I think I shall always remember them.[5]

これを見ると、彼女たちは自分たちの創作の遊びを時に秘密にするもの、しないものという区別をしていたことがわかる。そして秘密のものほど面白く、また明かされないことでその魅力を増していく。それは、秘密の遊びは面白いから決して忘れることはないだろうという、シャーロットの自信に満ちた書き方からも窺える。

また、同じ年に書かれた「島の人々の起源」（“The origin of the Islanders,”1829）にあるように、ブロンテたちの創作の遊びの舞台が島に設定されていたことにも注目したい。周囲を海に隔てられた島は、それだけで他者から隔絶された独立した位置を占める。そこには他の干渉を許さない、一種の王国が容易に建設され得るのである。

こうした記述や舞台設定を見ると、ブロンテたちの遊びがある秘められた、閉ざされた環境で発展していった様子が窺える。そして実際、子どもたちはそのような状況で空想の物語世界にふけっていた。父パトリックは司祭の仕事に追われていたし、母マリア（Maria Branwell Brontë, 1783-1821）は子どもたちが幼いうちに他界していた。階級意識の強い当時のイギリスでは、ブロンテ家の子どもたちのような司祭の子どもは一般の村の子どもたちと交わることは稀であった。家庭においても地域でも、彼らは一種独立した環境におかれていたということができる。それは同時に他者に管理されたり干渉されたりしない、自分たちが支配し得る環境ということができよう。彼らはそのような環境で自分たちの遊びを発展させていった。もし自分が自由に支配できる世界があったとしたら、それをわざわざ現実世界に繋ぎとめておく必要などない。ブロンテたちは、現実とは異なった、自分たちがまったく自由に支配できる世界を想像した。その世界は、現実と違っていることにこそその意義があったということができるかもしれない。こうして、初期作品の舞台となる、魔神が登場する超自然の世界が生み出されたのである。

ところで、後にシャーロット・ブロンテが批評家G・H・ルイス（George Henry Lewes, 1817-78）に推薦されて強く反発したジェイン・オースティン（Jane Austen, 1775-1817）もまた、本格的な作家活動に入る前に多くの初期作品を書き溜めていた。オースティンは優れた現実観察で知られるが、初期作品においては、短期間のうちに次々恋愛、婚約、婚約破棄を繰り返し、簡単に殺人まで犯すヒーローや[6]、自分の家屋敷を会ったばかりの男にまるまる投げ与えてしまう夫婦など[7]、現実には起りそうもない突拍子もないエピソードが描かれることもある。しかしながら、それは現実にありそうにないことではあっても、決して超自然の出来事とまではいかない。ブロンテたちのように魔神が登場したり、死んだはずの者が生き返ったりという展開は見られない。彼らとは異なり、オースティンの物語は、やはりあくまでも現実に根ざしたものなのである。このように、後にまったく異なった性質の小説を生み出すシャーロット・ブロンテとジェイン・オースティンは、すでに初期作品においてもこのような大きな違いを示していたことがわかる。

さて、話をブロンテきょうだいに戻すと、彼らは物語を創作しながら自分たちだけの秘密の世界を大いに楽しんだ。こうした創作を秘密にしておく傾向は、姉妹がそれぞれ小説を発表した後も執拗に身元を伏せていたために、3人のベル兄弟が実は1人であるという風評を招き、

シャーロットとアンがはるばるロンドンまで事情を説明しに上京しなければならない事態を招いたり、またシャーロットの親友エレン・ナッシー（Ellen Nussey）にすら事実を明かさなかったというエピソードにもつながっていくのかもしれない。

しかし、この秘密の世界はきょうだいの間では共有されていた。後に四人の共同作業はシャーロットとブランウェル、エミリとアンの二手に分かれるが、それでもエミリとアンが作り出したゴンダルも、姉と兄のアングリアと同じくアフリカや太平洋といった遠く隔たった土地を舞台とし、権力闘争と恋愛が描かれ、またともに似通った名の人物が登場する。こうした創作を合同して行った体験は、姉妹が後に小説を執筆した際にも、毎晩三人で互いの作品について批評しあっていた習慣にその名残を見ることができるであろう。

こうして、きょうだいが作り出した遠く西アフリカの架空の王国の物語は、その後も長く書き続けられていく。この長大な物語はシャーロットとブランウェルが作り出したアングリア物語、エミリとアンのゴンダル物語へとそれぞれ別かれる。シャーロットの場合は十数年で終わり小説作品へと切り替わるが、ブランウェルやエミリはそれぞれ何らかの形でこの初期作品の世界を描き続け、生涯にわたって創作のテーマであり続けた。ここでシャーロットとブランウェルが作り出した物語世界を例に取って、それがどのようなものであったのか概観してみよう。

物語の始まりが父の買って来た十二体の兵隊人形であったことはすでに述べたとおりであるが、これをモデルにした十二人の雄はイギリスを出発し、原住民と戦いながらも西アフリカに「グラスタウン」という都市を建設する。これには魔神の力も加わっていた。やがてシャーロットは自分の崇拝するウェリントン公爵から彼の息子、アーサー・ウェルズリーを、ブランウェルはロウグことアレグザンダー・パーシーをそれぞれ自分のヒーローとして物語を描くようになる。アーサー・ウェルズリーはやがてドゥアロウ侯爵、ザモーナ公爵、後にはアングリア王国の国王と呼び名は変わっていくが、シャーロットは彼を主人公とした社交界の華やかな恋愛を好んで描いた。一方ブランウェルは、これもアレグザンダー・パーシーからエルリントン卿と名前を変える主人公を中心に、王国の政治的な側面を題材にして物語を進めた。陰謀や反乱、革命を企てるエルリントン卿は、シャーロットの主人公と対立し互いにせめぎ合う。シャーロットは学校で学ぶためにハワースの自宅を離れることがあったが、その間ブランウェルが独自に進める物語の展開を所々取り入れながら自分も物語を書いていった。ザモーナがエルリントン卿の娘、メアリ・ヘンリエッタと結婚したことでストーリーはさらに複雑化していく。

しかし、ザモーナが結婚したのはこれが最初ではない。1832年に書かれた「婚礼」（“The Bridal”）では、当時まだアーサー・ウェルズリーと呼ばれていた彼は初恋の女性メアリアン・ヒュームと結ばれている。しかし別な物語では、彼はすでに15歳当時、父の部下の娘であったミーナ・ローリーと恋愛関係にあったとされており、当初ロマンティックな恋愛物語のヒーローとして描かれていた彼は、後にはさまざまな女性遍歴を繰り返すバイロニック・ヒーローとして登場することになる。

こうして華やかな恋愛と戦争とに明け暮れるアングリア王国の物語は、しかし作者が大人へと成長するにつれその様相も少しずつ変化する。特にシャーロットの場合、「アングリアよさらば」（“Farewell to Angria”, 1389）を書く少し前には、それまでとは趣を異にする、現実感覚に根ざした物語を志す傾向が見て取れるようになってくる。

Ⅲ 後の小説作品との関連

きょうだいが紡ぎ出した膨大な量の物語は、さまざまな形で後の Major Works に引き継がれていく。ブランウェルの場合は、彼が残した最後の小説の断片、1845年の晩夏に書き始められたとされる “and the weary are at rest” においても、主人公はノーサンガーランド・ハウスに住むアレグザンダー・パーシーであり、未だにアングリアの世界がほぼそのまま継承されている。また、シャーロットが1834年に書いた「呪文」（“The Spell, An Extravaganza”）では、死んだ者の棺を暴くという、『嵐が丘』（*Wuthering Heights*, 1847）の墓暴きを連想させる言及があったり、同じ作品に登場するシーモア伯爵夫妻の六人の娘の名はセシリア、イライザ、ジョージアナ、キャサリン、アグネス、ヘレンと、シャーロットだけでなくエミリやアンの作品に登場するヒロインたちと同じ名である。[8]

以上のように、概観しただけでも初期作品の世界が後の小説作品に大きく結びついていく存在であることは容易に理解できよう。そこで次に、きょうだいのなかでももっとも多くの初期作品が残されているシャーロットの場合を例に取って、後の作品との関連をもう少し詳しく見ていこう。

ⅰ さまざまな関連

書き方の癖、類似した登場人物や設定、用いられている語句など、初期作品と後の小説との関係は、さまざまなところに見て取ることができる。例えば、シャーロットは小説のなかでしばしば詩を引用することがある。『ジェイン・エア』（*Jane Eyre*, 1847）では第 3 章にベッシーが歌う「孤児の歌」、第24章にロチェスターが歌う恋の歌が、また『教授』（*The Professor*, 1857）では第23章にフランシスが口ずさむ詩が引用されている。こうした傾向はしかし、初期作品の頃からすでに彼女の常套的な書き方であった。初期の *Blackwood's Young Men's Magazine* には独立した作品として詩が掲載されることもあったし、あるいは物語のなかに引用される場合もあり、いずれにしてもブロンテたちにとって詩と物語が深く結びついたものであったことは容易に想像できる。

また、後の小説のヒロインたちがさまざまな障害に遭いながらも一途に恋愛をまっとうしたように、初期作品の世界でも数々の女性たちが、献身的に、あるいは盲目的にアーサー・ウェルズリー（ドゥアロウ侯爵、ザモーナ公爵）との恋に溺れている。初期作品では想像力を奔放に働かせて物語を執筆しているため、後の作品よりも展開が一層ドラマティックになっている。そのため彼女たちの恋愛は文字通り命を懸けたものであり、実際に「あの方（ザモーナ公爵）のためなら、死んでみせましょう」と言ってはばからないヒロインも登場する。[9] 妻たちでさえ、彼の一挙手一投足に翻弄されている。

さらに具体的な例としては、初期作品群の最後に書かれた「ヘンリー・ヘイスティングズ大尉」（“Henry Hastings”, 1839）が、後の小説に直接つながる要素をふんだんにもっている。ヒロインは初期作品の初めの頃に登場したようなこの世ならぬ美しさの名門貴族の令嬢たちではなく、エリザベスという身分が低く、美人でもなく、コンパニオンや家庭教師をして自活することを余儀なくされている女性である。彼女はジェイン・エアの前身となるヒロインとして注目される存在である。

また、この物語には、『ジェイン・エア』の第 9 章に描かれるヘレン・バーンズの墓に先行する次のような墓の描写がある。

> It was of marble, not stone; plain and unornamented, but gleaming with dazzling whiteness from the surrounding turf. At first sight it seemed to bear no inscription, but looking nearer, one word was visible: 'RESURGAM' . Nothing else, no name, date or age.[10]

大理石の墓石、'RESURGUM' という銘は、『ジェイン・エア』に描かれるヘレンの墓とまったく同じものである。[11]

Her [Helen's] grave is in Brocklebridge churchyard: for fifteen years after her death it was only covered by a grassy mound: but now a gray *marble* tablet marks the spot, inscribed with her name, and the word "*Resurgam*." (Italics are mine) [12]

「ヘンリー・ヘイスティングズ大尉」のなかでは、この墓はザモーナ公爵を愛しすぎたために死んでしまったある乙女の墓という設定になっているが、その乙女の名前はロザモンドで、これも『ジェイン・エア』に登場する女性と同じ名前になっている。

他にも、ここまで直接的ではなくとも、やはり後の作品へのつながりを感じさせる物語はいくつも見出すことができる。再び『ジェイン・エア』に関連するものであるが、1829年に書かれた「銀の盃」（"The Silver Cup"）にはゲイツヘッド・ホールのリード家の人々を髣髴させるダナリー家という家族が登場する。

> In the year 1829, lived Captain Henry Dunally, a man whose possessions in this world bring him in £200,000 a year. He was the owner of a beautiful country seat, about 10 miles from the Glass Town and lived in a style which, though comfortable and happy, was some thousands below his yearly income. *His wife, a comely lady in the 30th year of her age, was a person of great management and discretion, and given to use her tongue upon occasion*.
>
> They had 3 children, the eldest of whom was 12, the second 10 and the youngest 2 years of age. They went by the separate names of Augusta Cecilia, Henry Fearnothing…and Cina Rosalind. These children had, as may be supposed, each a different character. *Augusta was given to being rather mystical among the others. Henry was a very wicked, wild boy, and Cina was a pet*.[13] (Italics are mine)

管理は巧みだが子どもたちには甘く、都合のいいように嘘をつくことができるレディ・ダナリー、母親の感情には無関心で叔父が絞首刑になるのを平気で見物に行く息子ヘンリー・フィアナッシング、神秘的なところがあり母親のそばで縫い物をする娘オーガスタと、母親のお気に入りのシーナは、実際、その家族構成においても性格づけにおいても、リード家のリード夫人、ジョン、イライザ、ジョージアナの原型となる登場人物といえよう。

以上のように、初期作品のなかには後の作品につながるいろいろな要素を数多く指摘することができる。ここでは次に、個々の事例ではなく、シャーロットの後の小説の特徴となる要素と初期作品との関連について考えてみたい。

ii 絵画的描写

シャーロットの作品に対する評価は、出版当初から現代に至るまで、時代や批評方法の変化

に伴ってさまざまに変化してきた。19世紀当時に高く評価されていたことが必ずしも21世紀において評価されているとは限らない。そうした評価の変遷にもかかわらず、出版当初からほぼ一貫して認められているものに彼女の優れた描写力が挙げられる。風景などを描出する際の彼女の見事な筆致は出版当初からすでに高く評価され、それらはしばしば絵画的であると評されてきた。そして彼女が作家になる前には職業画家になることを真剣に考えていたことも知られており、彼女の画家としての才能が文章表現をより豊かにしたと考えられている。

しかし彼女の初期作品群を見ると、絵を描く才能があったことが文字による表現をも絵画的にしたというよりは、むしろシャーロットにとっては絵を描くことと物語を語ることが同時進行の一つの作業だったのではないかと思われる。なぜなら、初期作品のなかには、作者による記述だけではなく、同時にその挿絵もついているものも見られるからである。現存するもっとも初期の彼女の初期作品 “There was once a little girl and her name was Ane”（1828）は、物語と同時にシャーロット自身による水彩の挿絵が描かれ、文章とともに城や帆船の絵が一体となって物語世界を作り上げている。

“There was once a little girl and her name was Ane” pp. 2-3[14]

シャーロットにとっては、物語の創造はペンを執ることであると同時に絵筆を執ることでもあったのである。彼女には二つの表現手段があり、それらが相互に影響しあってより描写的な表現を身に着けて行ったのではないであろうか。

興味ぶかいのは、シャーロット自身は絵を描くとき実物や手本を写生するということがほとんどであったのに対し、彼女の分身ともいわれる『ジェイン･エア』のヒロイン、ジェインは、作者と同じくやはり好んで絵を描くけれども、シャーロットとは異なり写生ではなく自分の頭のなかに浮かんだイメージを描く空想画を得意としている点である。同じ絵を好んでも描く対象が異なっている。けれども、シャーロットが物語を作り出す際、現実社会をつぶさに観察して描くのではなく、自らの想像力を自由に働かせて描き出したことを考えると、想像力による創作という点ではやはり二人は共通しているといえるのかもしれない。

iii ロマンティシズム

作家シャーロット･ブロンテの特質を一言で表すとしたら、やはりそのロマンティシズムを挙げることになるであろう。彼女のロマンティックな傾向は、初期作品においても遺憾なく発

揮されている。彼女のこうした要素が最初に本格的に示された作品は、1830年の「アルビオンとマリーナ」（“Albion and Marina”）である。この作品において初めて恋愛や結婚という彼女独自のテーマが登場する。ブロンテたちの物語作りが始まったのが1826年頃からであるから、始まって 4 年ほど経過していたことになる。最初からシャーロットがそうしたテーマを扱っていなかったのは奇異に思われるかもしれないが、これは彼女たちの創作の原点がブランウェルの木製の兵隊人形であったことを考えれば納得できる。それまではこの人形たちの冒険や戦いが中心的な内容であったし、また人形の実際の持ち主であるブランウェルは当然自分の好みを主張しやすかったであろう。それまで男性だけが登場する権力闘争に明け暮れていたシャーロットは、ようやく自分自身が書きたいものに辿り着いたのかもしれない。

「アルビオンとマリーナ」は、イングランド南部の牧歌的な村から始まる。公爵の長男アルビオンはベルベデーレのアポロ像にも喩えられる美青年で、公爵家の侍医を務めるスコットランド人の娘マリーナと恋に落ちる。二人は公爵に結婚を許されるが、まだ若すぎるとの判断からアルビオンはアフリカのグラスタウンへ遣わされる。こうして 4 年の歳月が経ち、アルビオンがレディ・ゼルジア・エルリントンという才能豊かな美女にふと心惹かれた夜、彼はマリーナの幻影を見る。突然不安に駆られてイギリスに戻るが、幻影を見たその晩にマリーナが亡くなっていたことを知るというのが主なストーリーである。

ここには若く美しい二人の純粋な恋愛、引き離されてしまった恋人同士の悲しみ、恋人を待ち焦がれ、彼が死んでしまったという噂に絶望し命を落としてしまう乙女など、ロマンティックな要素がふんだんに盛り込まれている。しかも、単純にロマンティックなだけでなく、恋人が他の女性に心を動かされる部分も同時に描かれており、そうした人間の内面の揺らぎにもシャーロットが早い時期から関心を寄せていたことがわかる。

こうして始まったロマンティックな物語の執筆は、シャーロットが初期作品を書き続けていた期間、ずっと彼女の作品の基調をなしていった。しかしながら彼女はまた、しばしばロマンティシズムとは対照的なリアリズム的要素をもつことも指摘されている。初期作品の世界を後にしたのは「アングリアよさらば」にあるように、より冷静で客観的なものを書くためであったし、最初の小説『教授』は明らかにリアリズムを目指したものであった。一見相容れないかのように思われるこうした傾向は、しかしやはり彼女が本質的にはロマンティシストであったからであると思われる。リアリズムもまた、自分自身がもっていないものへの憧れ、自分とは異なったものを求めてしまうというロマン派独特の性質ゆえに彼女が求めたものではないであろうか。

しかしそのために、後のシャーロットの作品は一度にさまざまな要素を抱えもつことになってしまった。彼女はロマンティックな恋愛事件に筆を揮う一方で社会小説を志したり、自立した女性を描こうとするかと思えば恋愛のためにすべてをなげうつことも厭わないヒロインが現れたりする。彼女の作品にはこうした矛盾した要素が同時に存在し得るのである。初期作品では、初期の段階では基本的にロマンティシズムの傾向が非常に強いが、こうしたリアリズムの傾向も創作時期の終わりに近くなると顕著に見られるようになってくる。

iv 超自然の要素

先に触れた「アルビオンとマリーナ」には、ロマンティックな要素のほかにも、シャーロット独特の特徴が描きこまれている。それは、超自然の要素である。すでに述べたように、アルビオンはイギリスから遠く離れたアフリカのグラスタウンで彼女の幻影を見、声を聞くのであ

るが、それは偶然にもマリーナが息を引き取るまさにその瞬間であったことが、後に彼女の墓碑銘からわかる。そしてマリーナに会うためにイギリスに戻った際にも、実際には廃墟となった彼女の屋敷跡で彼はマリーナのハープの音を耳にし、また再び彼女の亡霊を見る。単なる幻覚とは片付けられない、そして物語の展開において非常に重要なエピソードにこうした超自然の力が用いられているのは、シャーロットが弟や妹たちと自由奔放な空想の世界を楽しんだ結果であろう。

「アルビオンとマリーナ」に描かれた不思議なテレパシーのようなものは、よく知られているように、後に『ジェイン・エア』の第35章で、主人公のジェインとロチェスターの間で「ジェイン！ジェイン！ジェイン！」という呼び声となって再び描かれる。この絶対に聞こえるはずのない声により物語は急展開し、ヒロイン、ジェインはセント・ジョンとのインド伝道から180度方向を転換し、ロチェスターの許へと戻っていくことになる。この呼び声に対して「機械仕掛けの神」を利用した安易な解決方法であるという非難があるのは事実だが、しかしこれがストーリーを展開させるうえで非常に重要なきっかけになっていることは否定できないであろう。

他にも、1829年に書かれた「アイルランドでの冒険」（“An Adventure in Ireland”）にもこうした夢とも超自然ともつかない出来事が描かれている。主人公が南アイルランドを旅している途中で偶然立ち寄った城に一泊したところ、夜中に白いシーツに包まれた骸骨を目撃する。恐ろしさに圧倒されて、悲鳴を上げようとしても舌が麻痺し、全身が恐怖で震えてしまう。

> I had slept about an hour when a strange sound awoke me, and I saw looking through my curtains a skeleton wrapped in a white sheet. I was overcome with terror and tried to scream, but my tongue was paralysed and my whole frame shook with fear.[15]

こうした超自然の存在を感じさせる恐怖体験は、同じく『ジェイン・エア』の冒頭、ゲイツヘッド館の「赤い部屋」でジェインが遭遇する伯父の幽霊を思い出させる。

テレパシーや幽霊、幻といった超自然の要素は、幼いブロンテたちが好んで読んでいた『アラビアン・ナイト』に代表される、魔神が登場するファンタジー的な読み物の影響が、そのまま初期作品の世界に持ち込まれていたことが遠因となっている。

ｖ ミステリーの要素

そして、こうした超自然の要素と相俟ってシャーロットの物語を豊かにしているのは、ミステリーとしての側面ではないであろうか。シャーロットのストーリーには読む者を惹きつけてやまない面白さがある。次の展開がどうなるのか、謎めいた登場人物は一体誰なのか、仄めかされる秘密の真相とはどのようなものなのか、読者はこうした謎に惹きつけられ、物語の最後まで一気に読み通してしまうのである。『ジェイン・エア』が出版当初「ジェイン・エア・フィーバー」という言葉が生まれるほどに人気を博したのには、こうした読ませる面白さが要因の一つとしてあったことは確かであろう。ソーンフィールド・ホールの謎めいた雰囲気、夜中に起る火事や不気味な笑い声など、ゴシック・ロマンスの要素は読者を強く惹きつける魅力をもっている。

シャーロットがこのように才能豊かな語り手であったことは、ロウ・ヘッド（Roe head）時代の次のようなエピソードからも窺い知ることができるであろう。

> Then, at night, she was an invaluable story-teller, frightening them almost out of their wits as they lay in bed. On one occasion the effect was such that she was led to scream out aloud, and Miss Wooler, coming upstairs, found that one of the listeners had been seized with violent palpitations in consequence of the excitement produced by Charlotte's story.[16]

シャーロットの優れた語り手としての才能と、物語そのものの謎解きの面白さが絡み合った物語は、初期作品のなかにもいくつも見出すことができる。例えば、「秘密」（“The Secret”, 1833）にはドゥアロウ侯爵の妻、メアリアンが結婚前からずっと胸に秘め続けた秘密が描かれている。それは彼女の出生の秘密でもあり、彼女はその秘密を裏付ける証拠を隠滅するため、夜中にただ一人、恐ろしいエルリントン卿の館に赴いたりする。遠い海で死んでしまったはずの許婚者の登場や、指輪を探す不気味な女など、ミステリアスな登場人物や事件が次々と描かれ、最後にはその秘密が明かされる。こうした謎解きの妙味は読む者を捉えて離さない。また、この「秘密」には死んだ許婚者の幻が登場する場面があり、先に指摘した超自然の要素も相俟って、物語に一層の面白味を加えている。

以上のような要素を、シャーロット・ブロンテはきょうだいとの子ども時代からの書き物の遊びを通して身に着け発展させていった。彼らが独自の秘密の世界を持ちえたこと、そこで自由な想像力の飛翔が可能であったこと、また父パトリック自身も詩集を発表するなどして物を書くことがごく自然なこととして推奨される空気が家庭にあったことなどが、膨大な初期作品の世界を築くことを可能にした。そこには子どもらしい奔放な想像力とともに、英文学史上の奇跡といわれるブロンテ三姉妹の小説が生まれる萌芽が、みずみずしく見出されるのである。

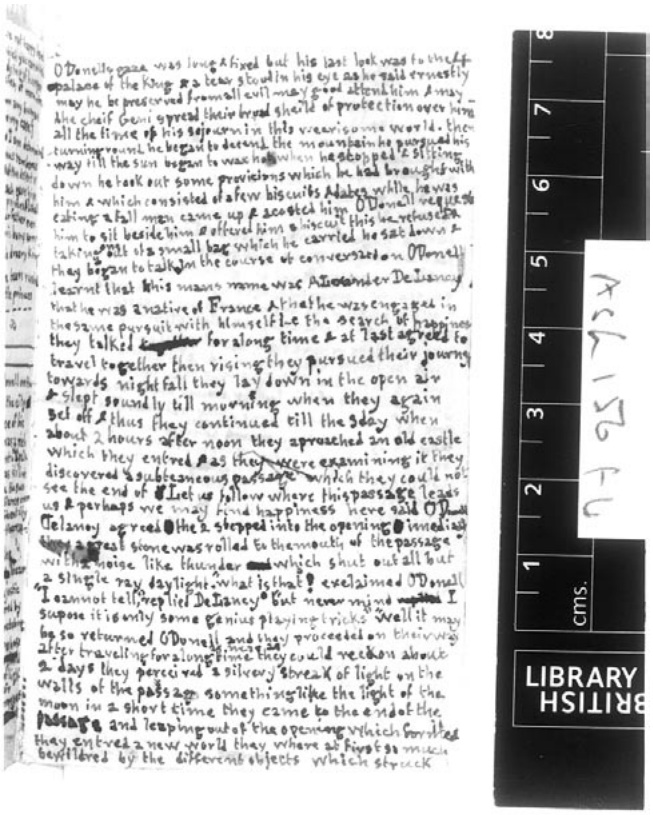
注

[1] “The History of the Year”（1829）, Christine Alexander ed., *The Early Writings of Charlotte Brontë.* Vol. I（Oxford: The Shakespeare Head Press, 1987）p. 5.

[2] この縦 5 cm ×横 4 cm というサイズは、初期作品のなかでも特に小さいものであるが、紙面がもう少し大きくなった場合でも、決して文字の大きさはそれに比例して大きくなることはなかった。例えば、「幸福の探求」（“The Search after Hapiness（sic）”, 1829）は縦約10cm ×横約 6 cm（厳密には、本文全13ページのうち最初と最後のページが縦10.2cm ×横6.3cm、それ以外のページがほぼ縦 9 ~9.5cm ×横5.8cm。手で綴じた小冊子で、そのためこのようにページごとに大きさが異なる）と紙面の大きさは倍近くになっているが、そこに書き記されている文字の大きさはほとんど変わらない。“The Search after Hapiness”を例に取ると、詩の引用などもあるため各ページの記述単語数は一定ではないが、例えば引用やタイトルなどのない、地の文だけで成り立っている 3 ページ目を見てみると、1 ページが40行からなり、この小さな紙面になんと430語もの単語が記述されている。The British Library, Ashley, 156.〈次ページ〉

[3] *Blackwood's Young Men's Magazine*（Dec. 1829）, The British Library, Ashley, 157. グレーの紙の表紙を手縫いで綴じた小冊子。全18ページからなる。冊子の紙の大きさは多少不揃いだが、ほぼ縦 5 cm ×横 3 . 5 cm。ページの内容によっても異なるが、この小さな紙面に30行内外の文字がびっしりと書き込まれている。

[4] ちなみに、こうした豆本作りは彼女たちに限ったことではなく、わが国にもいくつか例を見ることができる。例えば、江戸時代の国学者、本居宣長の長男、春庭（1763-1828）は、縦 8 cm ×横 6 cm の和歌集の豆本を作り、『新古今集』や『三代集』（古今集、後撰集、拾遺集）の和歌を、極細筆で 1 ページに11首ずつ書いている（財団法人 鈴屋遺蹟保存会 本居宣長記念館所蔵）。ついでながら、この本居春庭は、若いころから書物や地図などを写し父の研究を助けていたが、生まれつき虚弱で30歳前後に目を病みついに失明したとされている。因果関係は明らかではないが、あるいはこうして目を酷使したことも何らかの影響があったのかもしれない。また、名古屋市にある徳川美術館には徳川家の姫君たちの雛人形の道具類のなかに『源氏物語』五十四帖が



“The Search after Hapiness”, p.3
（actual size）

あり、やはり人形の大きさに合わせた豪華な豆本となっている。

[5] “The History of the Year”, Alexander, p. 5.

[6] Jane Austen, “Sir William Mountague”（c. 1787-90）.

[7] Austen, “Evelyn”（1792）.

[8] Eliza, Georgiana, Helen は *Jane Eyre* の登場人物であり、Catherine は *Wuthering Heights* の、そして Agnes は *Agnes Grey* のそれぞれヒロインの名前である。

[9] “The Spell, An Extravaganza”（1834）, Christine Alexander ed. *The Early Writings of Charlotte Brontë*. Vol. Ⅱ, Part 2（Oxford: The Shakespeare Head Press, 1991）p. 176.

[10] “Henry Hastings”（1839）Frances Beer ed., *The Juvenilia of Jane Austen and Charlotte Brontë*.（Penguin Books, 1986）, p. 361.

[11] この“Resurgam”という墓碑銘はシャーロットが独占していたアイディアではなかったようで、弟ブランウェルはこの“RESURGAM”という銘を刻んだ墓の絵を1842年に描いている（The Brotherton Library, Leeds University Library. Ed. by Christine Alexander and Jane Sellars, *The art of the Brontës*. Cambridge University Press, 1995, p. 345）。この絵よりもシャーロットの“Henry Hastings”の執筆の方が 3 年早いが、あるいはこれは初期作品の執筆を通して姉弟が共有していたイメージだったのかもしれない。もしくは、父からラテン語教育を受けていたブランウェルの発案ということも考えられる。

[12] Charlotte Brontë, *Jane Eyre*. Ed. by Jane Jack and Margaret Smith.（Oxford at the Clarendon Press, 1975）, p. 97.

[13] Charlotte Brontë, “The Silver Cup ― A Tale”（1829）, Alexander, Vol. Ⅰ, p. 70.

[14] Charlotte Brontë, “There was once a little girl and her name was Ane”（1828）, Brontë Parsonage Museum, Bonnell Collection, 78.

[15] Charlotte Brontë, “An Adventure in Ireland”（1829）, Alexander, Vol. Ⅰ, p. 20.

[16] Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*（1857）（London: John Murray, 1920）, p. 106.